

翻訳

ジョルダーノ・ブルーノ「キュレネの驢馬」

岡本 源太 訳

対話者

驢馬、ピュタゴラス主義者ミッコ、メルクリウス

驢馬 どうしてわたしは、高貴で、稀有で、数奇なあなたからの賜物を濫用すべきだというのでしょうか、ああ輝かしきユピテルよ。どうしてこれほどの才能があなたからわたしに差し出されたというのに、あなたがその並はずれた眼でわたしを見つめた（「運命に選ばれた」）というのに、わたしはこのうえなく恩知らずな沈黙の大地のもとで、この闇に包まれた暗い大地のもとで、埋もれたままにいるのでしょうか。わたしは話したい欲求にさらに長きにわたって苛まれつづけなければならないのでしょうか。この尋常でない叫びを口から出さないがためにです。そう、この混乱した世紀に、あなたの高邁さこそがわたしの内なる精神のなかに種を蒔いたのです（しかも、そとへとあらわれ得るためにです）。ですから、驢馬の宮殿が開かれんことを、機会の鍵でもって開かれんことを。主体の才覚によって舌が解放されんことを。志向の腕に導かれた注意の手で、驢馬の記憶の庭にある木々の果実、草々の花が取り集められんことを。

ミッコ おおただならぬ不思議、おお驚嘆の怪奇、おお信じがたい驚異、おお奇跡のごとき出来事だ。神々よ、禍を遠ざけたまえ。驢馬が話すとは、話す驢馬とは。おおムーサたち、おおアポロ、おおヘラクレスよ、分節された声がこのような頭から発せられるとは。口を噤め、ミッコよ、おそらく騙されておるのだ。おそらくこの皮のしたにだれか人間が隠れておって、わしらをからかっておるのだ。

驢馬 よく考えてください、ミッコ。わたしは欺くようなものではありません。このうえなく自然な話す驢馬なのです。わたしはかつて人間の顔をもっていたことを憶えています、いまきみは獣の肢体をもつわたしを見ているのです。

ミッコ あとで（おお受肉した悪霊よ）そなたがだれで、なにもので、どのようなものなのかを尋ねるとしよう。いまはまず、そなたはいったいなにを求めてここにおるのかを知りたい。いかなる予兆をわしらにもってきたのだ。

神からのどのような命令をたずさえておるのだ。この舞台はいったいなにでもっておわるのだ。いかなる目的でそなたは、くどくどと声をあげながら、このわしらの柱廊に姿を見せようとやってきたのだ。

驢馬 まず知っていただきたいのは、わたしはどこかのカレッジかアカデミーのメンバーになって、教授に任命してもらおうと思っていることです。というのも、わたしの有能さはたしかなものだからです。といっても、目的なのは、わたしの着想に注意を向けてもらうためでも、わたしの発言を熟慮してもらうためでも、わたしの教説を信じてもらうためでもなくて……。

ミッコ おおユピテルよ。かつてこのような事実が、出来事が、事例が、「永遠に」記録されたことがあっただろうか。

驢馬 いまは驚異は措いておきましょうよ。それで、すぐにでもわたしに答えてほしいのです。きみでも、わたしの話を聞きに集まってきた啞然としているほかの方々でもかまいません。ああトーガをまとい、リングをはめ、円錐形の帽子をかぶった教育者たち、大教育者たち、知恵ある英雄にして半神たちよ、きみたちは、集団のなかに、社会のなかに、宿舎のなかに、共同体の帯と旗のもとに、きみたちがいま見て聞いているこの驢馬を受け入れることを望み、喜び、願いますか。どうしてきみたちは、そんなに笑いながら驚いたり、またそんなに驚きながら笑ったり、そして（これが大多数ですけど）啞然として唇を噛み締めたりして、だれも答えてはくれないのですか。

ミッコ おわかりのように、彼らは驚愕のあまり話せぬのだよ。そして、みながわしに向きなおって、わしがそなたに答えるようにと合図しておる。学頭としてそなたに解決を与えるべきこのわしに、そなたがみなと同じように決断を期待すべきこのわしにな。

驢馬 ここはなんのアカデミーなんですか。門のうえに「線を越えるなかれ」と書かれてますけど。

ミッコ ここはピュタゴラス主義者たちの学園だ。

驢馬 入ることはできますか。

ミッコ アカデミーの者になるには、多数の困難な条件がないわけではないな。

驢馬 その条件というのはどんなものですか。

ミッコ そうとうにたくさんある。

驢馬 尋ねたのは、どんなものかということで、どれくらいなのかではないんですけど。

ミッコ そなたにうまく答えてやるために、主要なものだけを語ろう。第一に、迎え入れられるべく申し出る者はだれであれ、受け入れられるまえに、

身体、観相、才知、の素質を検査されなければならない。知っておるように、身体が魂からもつ、そして魂ともつ大いなる相関関係の結果のためにだ。

驢馬 「ユピテルからはじめよう、ムーサたちよ」、結婚したいのであれば。

ミッコ 第二に、迎え入れられたなら、一定期間（少なくとも二年間）、口を噤まねばならぬ。いかなる点であっても、理解していないことについてさえ、尋ねることは許されぬし、命題について議論したり検討したりすることも許されぬ。この期間は「聴聞生」と呼ばれる。第三に、この期間が過ぎると、聞いたことについて話し、尋ね、書くことが許され、みずからの見解を表明することも許される。このときは「数学者」ないし「カルデア人」と呼ばれる。第四に、こうしたことがらに習熟し、このような研究に精通したなら、世界の作品と自然の原理の考察に向かうことになる。行程はここでおわり、「自然学者」と呼ばれることになる。

驢馬 それ以上には進まないのですか。

ミッコ 自然学者以上の者はありえぬ。自然を超えるものについての理を所有することはできぬからな。自然を超えるものが自然のものごとのうちで輝いているかぎりでのことなら、話は別であるにせよだ。というのも、自然を超えるものをそれ自体で考察するというのは、純化された高次の知性にしか起こりえぬのだ。

驢馬 きみたちのところには、形而上学はないのですか。

ミッコ ない。ほかの者たちが形而上学と見なしておるのは、論理学の一部分にほかならぬのだ。だが、このことは措いておこう。いまの話題に関わらぬからな。結論としては、以上がわしらのアカデミーの条件と規則だ。

驢馬 これがですか。

ミッコ そのとおりだ。

驢馬 ああ名誉ある学園よ、卓越した大学、麗しき教派、尊敬すべきカレッジ、輝かしきギムナジオン、無敵の競技団、第一級のなかでも第一のアカデミーよ。彷徨える驢馬は、喉の渴いた鹿が澄み切った冷たい水をまえにしているかのように、きみたちのまえにいます。この憤ましき驢馬は、巡礼者たちのこのうえなく優しき庇護者たるきみたちに嘆願し、きみたちの集団に加わることを渴望しています。

ミッコ わしらの集団に、とな。

驢馬 そうです、そうです、きみたちの集団にです。

ミッコ こことは別の門へと赴きなされ。というのも、ここからは驢馬は追放されておるのだ。

驢馬 では兄弟よ、きみはいったいどの門から入ったというのですか。

ミッコ 天は驢馬を話すようにできるとしても、かつて驢馬がピュタゴラスの学園に入ったことはないのだ。

驢馬 そんなに厳格ではないでしょう、ああミッコ。憶えていることでしょうけど、きみのピュタゴラスは、自然のふところに見いだされるものを軽視しないようにと教えています。わたしはいまは驢馬の形相のなかにいますが、偉大なる人間の形相のなかにとどまることもありえましてし、やがてそうなることもありえるでしょう。そしてきみは人間ですけど、かつて偉大なる驢馬だったかもしれませんし、やがてそうなるかもしれません。習性と場所の配分者にして転生する魂の配置者たる者にとって決断すべきと思われるならばです。

ミッコ では兄弟よ、そなたはアカデミーの条項と条件を理解したのかね。

驢馬 しっかりと。

ミッコ そなたの存在について、そなたの欠点のゆえに入るのが禁じられていることについて、言うことがあるかね。

驢馬 わたしの判断では、たくさんあります。

ミッコ では、わしらに聞かせておくれ。

驢馬 わたしが疑わしく思った主要な条件は、最初のものです。観相学者たちによれば教説の受容にもっとも適しているとされる性質を、つまり柔らかな肉も、繊細で曇りなく滑らかな皮膚も、わたしはたしかにもっていません。肉や皮膚が硬いことは、知性の鋭敏さとあいられないものとされています。けれども、このような条件については、わたしが思うに、学頭が免除をおこなえるべきです。というのも、品行の誠実さ、才知の機敏さ、知性の有能さ、さらにこうしたものの兄弟姉妹同胞たる諸々の条件など、ほかほとんどの部分がそのような欠点を補っているときには、その者をそにとどまらせるべきではないからです。魂が身体の体質にしたがうというのは普遍的だとすべきでないことは、措いておきましょう。なぜ普遍的でないかといえば、なにかもっと効力のある精神原理が、粗雑さや不調和をもたらす侵害に打ち克ち、優越することもありうるからです。この命題については、ソクラテスの事例を挙げておきましょう。観相学者ゾピュロスは、ソクラテスのことを節度がなく、愚かで、鈍く、軟弱で、少年愛をもち、移り気だと判断しました。これらすべてがこの哲学者には認められたのですが、こうした性向が実際に行為にあらわれることはけっしてありませんでした。ソクラテスは、たゆみない哲学の研究によって鍛えられていたのです。哲学はソクラテスの手に、自然の不調和の猛々しい波に対抗する堅固な舵を差し出したのです。研究によって打ち克てないものはあ

りませんからね。さて、観相学のまた別の主要な部分についても、つまり気質の体質ではなく肢体の調和した比例についても、きみたちに告げることがあります。しっかりと判断するなら、わたしのうちにはどのような欠点も見いだせないのです。知っていただきたいのですが、豚は美しい馬たるべきではなく、驢馬も美しい人間たるべきではありません。むしろ驢馬は美しい驢馬、豚は美しい豚、人間は美しい人間であるべきでしょう。この判断を推し進めるなら、豚には馬が美しく見えず、馬には豚が美しく見えないことになります。人間には驢馬が美しく見えず、人間が驢馬に恋をすることもないとすれば、反対に驢馬にも人間は美しく見えず、驢馬が人間に恋をすることもないのです。ですから、この法に則して、理性によってものごとが検討され推し量られるなら、おたがい固有の情緒にしたがって、美は多様な比例可能性にしたがって多様なのだと、認めあうことでしょう。もし美そのもの、分有によるのではなく本質によって美しいものでないとすれば、真に絶対的に美しいものというのはなにもありません。これは措いておくことにしますが、人間という種そのものにあっても、肉と呼ばれるものは、その肉を整える二十五の状況と補足において「習性の側面から」注意を向けられるべきでしょう。というのも、柔らかい肉についての観相学の規則は、また別の仕方でも誤っているからです。子供が大人よりも学問に適しているわけではなく、女性が男性よりも学問に相応しいわけでもないことを、考慮してみてください。もし、活動からもっとも遠く隔たった力能がもっとも大いなる適性と呼ばれているのなら、話は別ですけどね。

ミッコ ここまで、この者はまったく大いなる知を示した。つづけるのだ、驢馬よ、心ゆくまでそなたの理路を補強するがよい。なぜなら、

そなたが耕すは波のあいま 種を蒔くは砂のなか
 そなたが望むはただよう風を網に捕らえんこと
 そなたが希望を託すは女の心

なのだからな。ここであれ、よその教派であれ、アカデミーの者たちがそなたを受け入れるのを認めうるないし認めるべきであると望んでいるのであれば。だが、そなたには学識があるのだから、そなたの教説とともにひとりとどまることに満足しなされ。

驢馬 ああ分別のない者たち。わたしが自分の理路をきみたちに語ったのは、わたしを認めさせるためだったのだと、そんなふうに思っているのですか。わたしがこのようなことをしたのは、ユピテルのまえできみたちを弁明の余地なく咎めること以外の目的があったのだと、そう思っているのですか。ユ

ピテルはわたしを学識ある者にしたと同時に、博士にしたのです。わたしが期待していたのは、きみたちの有能さによる正しい判断から、この言葉が発せられることでした。つまり、「わたしたち人間ばかりのアカデミーに驢馬が入ることは不都合だ」、と。ほかのどの教派の学徒でも、このように言うことができます。けれども、きみたちピュタゴラス主義者は、根拠をもってこのように言うことはできません。わたしが入るのを拒否することで、きみたちはみずからの哲学の原理、基礎、身体を破壊してしまうのです。表面の、相貌の、外観のことを判断するのでなければ、いったいわたしたち驢馬ときみたち人間とのあいだにどんな差異が見いだせるというのでしょうか。おまけに、そんなのはばかげた判断です。いったいきみたちのどれほどが、驢馬のアカデミーのなかをさすらっているのでしょうか。いったいどれほどが、驢馬のアカデミーで学んでいるのでしょうか。いったいどれほどが、驢馬のアカデミーで成果をあげているのでしょうか。いったいどれほどが、驢馬のアカデミーで学位を授与され、死に、骨を埋めているのでしょうか。いったいどれほどが、驢馬のアカデミーで好意を得て、昇格し、賞賛され、列聖され、栄光を受け、神格化されているのでしょうか。その者たちが驢馬でなかったならば、ことがこのように進むのか、進みうるものなのか、わたしは知りませんし、わかりません。つかのまの善き生だけでなく、永遠の善き生を得るために、驢馬化できる教えを授けてくれるという、輝かしく名誉あるおおくの大学がありはしないのでしょうか。さあ、どれほどの、どのような能力と名誉が、驢馬性の門をくぐって入ってくるのでしょうか。さあ、どれほどの者たちが、驢馬的な能力と完成を分有していないために、邪魔され、排除され、拒絶され、罵倒されているのでしょうか。さて、なぜ数匹の驢馬が、あるいは少なくとも一匹の驢馬が、人間のアカデミーに入ることを許されないのでしょうか。どうしてわたしは、どこのアカデミーにも多数派の好意的な意見と声でもって受け入れられるべきでないのでしょうか。全員でないにしても、少なくとも大多数が、わたしたちのきわめて普遍的なアカデミーに登録され、記載されているというのにです。わたしたち驢馬が、あれほどひろくあまねくすべての者たちを受け入れているというのに、どうしてきみたちは、少なくともわたしたちのうちの一匹を受け入れるのをそれほどまでに厭うべきだというのですか。

ミッコ 最大の困難は、もっと尊厳があって重要なことがらにあるのだ。そしてな、これほどおおくの事例には関わっておらぬし、これほど些細なことに眼が開かれておるわけでもないのだよ。さほどの良心の呵責も嫌悪もなしにすべての者たちが驢馬のアカデミーに迎え入れられておるのだとしても、人間のアカデミーでそのようにすべきだというわけではないだろう。

驢馬 ですけど、驢馬になった人間と人間になった驢馬のどちらがより尊厳があるのか、きみはそれをわたしに言うことで、いくぶん解決できるでしょう。とはいえ、実はここにはわがキュレネの者がいるのです。杖と翼で彼のことをわかりました——ようこそ、麗しき翼ある者よ、ユピテルの使者、すべての神々の意志の忠実な解釈者、学問の惜しみなき贈与者、技芸の指導者、数学者たちの絶えざる託宣者、奇跡のごとき算術家、卓越せる雄弁家、美しき顔、流美な外観、雄弁な外見、優美な人物、男のなかの男、女のなかの女、不幸のなかの不幸、幸福のなかの幸福、すべてのなかのすべてよ。あなたはあらゆるところへ赴いて留まり、出会って迎え入れられます。あなたはどのような善きものをもってきてくれたのでしょうか。

メルクリウス 驢馬よ、おまえはアカデミーの者になってそう呼ばれるつもりなのだから、わたくしはかつて別の賜物と恩寵を与えた者として、いままた全権威をもっておまえをすべての〈学者〉にして〈教説者〉に叙任し、任命し、承認しよう。おまえがどこにでも入れるようにするためだ。だれもおまえに門を閉ざしておくことはできず、どのような侵害も妨害も与えることはできず、「対立においていかなるものも障害とならないように」だ。それゆえ、おまえが思い好むところへ入るがよい。わたくしたちは、ピュタゴラス主義の教団に見いだせる二年間の沈黙の条項にも、ほかのどのような教団の法にも、おまえがしたがわされるのを欲しない。というのも、「新しく生じた訴訟には、新しく法が制定される。これは、都合よく制定される法として理解されるのではない。必要なものと有用なものにしたがって配慮することが重要だとする最善の判断者の判断に、判決を依拠させる」からだ。それだから、聴聞者たちのあいだで話すがよい。数学者たちのあいだで考察し、観相するがよい。自然学者たちのあいだで議論し、尋ね、教え、表明し、決定するがよい。すべてのものとともに見だし、すべてのものと語りあい、すべてのものと兄弟になり、ひとつになり、同じになり、すべてを支配し、すべてであるがよい。

驢馬 おわかりになりましたか。

ミッコ わしらは耳が聞こえぬわけではないのだよ。

おわり

解題

以上に訳出したのは、ジョルダノ・ブルーノ（Giordano Bruno, 1548-1600）が一五八五年にロンドンで刊行した『天馬のカバラ』の末尾に附されている対話篇「キュレネの驢馬」（L'Asino Cillenico）の全文である。底本には、ジョヴァンニ・アクイレッキアによる校訂版 Giordano Bruno, *Cabala del cavallo pegaseo. Œuvres complètes*, VI, Paris, Les Belles Lettres, 1994 を使用した。

『天馬のカバラ』は、ブルーノのロンドン滞在期に出版されたいわゆる「イタリア語対話篇ロンドン六部作」の第五作目にあたり、六部作のなかでももっとも短い小品である。とはいえ、もっとも難解で謎めいている対話篇でもある。三つの対話からなる『天馬のカバラ』本篇では、エラスムスの描く痴愚女神のような口吻でもって無知を礼讃するサウリーノと、それに疑義を差し挟むセバストによる対話を軸にしつつ、そこに輪廻の記憶を保持しているオノリオや道化役の銜学者コリバンテが介入し、「驢馬」の形象に仮託された「無知」をめぐる議論が展開される。『天馬のカバラ』は、一六世紀にラテン語訳が刊行されたセクストス・エンペイリコスの諸著作に対し、早い時期に応答した書物の一つとしても知られている。けれども、特定の登場人物をブルーノの代弁者と見なしにくく、最終的に無知が肯定されているのか否定されているのか、単純に判断できない。加えて、本篇を締め括るはずの第三対話では、登場人物たちのそれぞれが急用のために集まれなくなった次第が語られ、無知をめぐる議論は中断したままおわってしまう。

対話篇「キュレネの驢馬」は、この中断したままにおわった『天馬のカバラ』本篇のあと、やや唐突にはじまる。本篇では「無知」の象徴であった「驢馬」が、ここでは登場人物（登場動物）として姿をあらわし、人間の言葉を喋りながら、ピュタゴラス主義者ミッコほか人間たちと論争していく。無知の問題は、「キュレネの驢馬」でも明示的には解決されない。とはいえ、『天馬のカバラ』第二対話第一部で展開された人間と動物の差異をめぐる議論を引き継いで、いわゆる「人間中心主義」に対していっそうはっきりとした批判が展開されている。人間中心主義への批判は、地球中心主義（天動説）への批判とならんで、四〇あまりを数えるブルーノの著作の数々に一貫して見いだせるモチーフだが、そのなかでも人間ならぬ驢馬の口から発せられる「キュレネの驢馬」での批判は、とりわけ痛烈なものである。この批判が、観相学への疑義や美の多様性の主張など、ブルーノ哲学の重要な側面とともに語られていることにも注意したい。短く謎めいているとはいえ、味読するに値する対話篇だろう。